

# 『フィンネガンズ・ウェイク』第Ⅲ部第3章冒頭における 聖パトリックの描写について

On the Description of St. Patrick in the Beginning Part of  
*Finnegans Wake* Book III Chapter 3

田 村 章

Akira TAMURA

## 1. はじめに

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882年–1941年) の『フィンネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*, 以下『ウェイク』とする) 第Ⅲ部第3章の中心的問題の一つが歴史記述である。本章の冒頭では、夢の中の世界という『ウェイク』全体の設定のもとに、ヨーン (Yawn) という名の巨人に焦点が当てられている。ヨーンは、アイルランドの聖なる丘の一つに横たわっていて、そこに“mamalujo” (476.32)<sup>1)</sup> と呼ばれる四人の年老いた歴史家がやって来て尋問を行う。ヨーンは歴史すべての貯蔵庫のような存在で、この章で読者は宇宙の創造から近代都市の建設に至るまでの歴史を目の当たりにすることになる。本章では歴史書もたびたび取り上げられており、古代から1616年までのアイルランド史の記録である『四導師の年代記』(*Annals of the Four Masters*, 17世紀に出版) に加えて、劇作家シェイクスピア (William Shakespeare) も活用した英国史の記録『ホリンシェッドの年代記』(*Holinshed's Chronicles*, 1577年出版) や旧約聖書の歴史書の一つ「エステル記」(*The Book of Esther*) なども現れている。

ヨーンは自分のことを“*This same prehistoric barrow*” (477.36) と述べているように、先史時代の巨大な塚になって横たわっている。彼はまた自分が“*Trinathan partnick dieudonnay*” (478.26) であると認めるように、『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*) の著者であるジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift), 伝説『トリスタンとイゾルデ』(*Tristan and Isolde*) の主人公トリスタン (Tristan), そしてアイルランドにキリスト教を広めた聖パトリック (St. Patrick) でもある。

本稿では、『ウェイク』第Ⅲ部第3章の冒頭部分 (474.1–485.7) を詳細に読み、ここでの聖パトリックの描写の意義と『ウェイク』における歴史の扱い方の一端を明らかにしたい。

## 2. 『ウェイク』における聖パトリックの記述の先行研究について

聖パトリック (389年頃–461年) は、ブリテン島に生まれアイルランドにキリスト教を広め、のちにアイルランドの守護聖人となった人物である。彼の命日の3月17日は聖パトリックの日 (St. Patrick's Day) としてア

イルランドのみならず北米やオーストラリアでも祝われている。またシャムロックを手にして「三位一体」を説いたことでも有名で、シャムロックの葉が彼のシンボルとなったことはよく知られている。

『ウェイク』における聖パトリックの記述に関する研究はそれほど多くはない。ジョイス研究の基本図書の中で比較的詳しく取り上げているのは、ジェイムズ・アサートン (James Atherton) の *The Books at the Wake* と アダリーン・グラシーン (Adaline Glasheen) の *Third Census of Finnegans Wake* である。アサートンは、『ウェイク』の出典研究である本書で、パトリックの伝記的な内容に関するソースとして、パトリック自身が記したいわゆる『告白』 (*The Confession of St. Patrick*, 455年に書かれたとされている) や 聖マケヴィン (St. McEvin) が書いた *The Tripartite Life of St. Patrick* (510年) を挙げている。グラシーンは *Third Census of Finnegans Wake* の “Patrick, St” の項 (225-26) で『ウェイク』のテキスト全体におけるパトリックに関する言及を簡潔に説明している。

『ウェイク』のテキストと聖パトリックの生涯の関わりを全体的に論じたものとしては、エドワード・コッパー (Edward A. Kopper, Jr.) による “Saint Patrick in Finnegans Wake” がある。この論文の冒頭でコッパーは次のように述べている。

Allusions to Joyce's use of Saint Patrick in FW are scattered throughout Joycean exegeses, but the Saint's role in the work has never been thoroughly evaluated. In the present paper I hope to take a step in the right direction. I propose to point

out several legends about Patrick that Joyce appears to have used in the Wake and to suggest that the Saint's life may well be a major structuring device in Joyce's enigmatic novel. The study is, then, not a complete one, but one which I hope is germinal.

(85-86, 下線は筆者による)

コッパーはこのように、『ウェイク』におけるパトリックの人生への言及の重要性を指摘している。さらにジョイスが用いたとされるパトリック伝として、ジョン・ベリー (John. B. Bury) が1905年に出版した *Life of St. Patrick and His Place in History* を紹介し、また最も重要な伝記として1185年にシトー修道会の修道士ジョスラン (Jocelyn) が著した *The Life and Acts of St. Patrick* を挙げている。

コッパーは、『ウェイク』のテキスト全体に散りばめているパトリックに関するアリュージョンを次の6つのエピソードに分けて解説している。

- (1) パトリックと古代アイルランドのリーレ (Leary) 王のタラでの対決 (AD 436年)<sup>2)</sup>
- (2) パトリックによる二つのドルイドの偶像 “Crom Cruach” と “Wurra-Wurra” への対応
- (3) パトリックと聖ブリギッド (St. Brigid), および娼婦に身を落とした女のきょうだいのルピタ (Lupait/Lupita)
- (4) ドルイドの王 Daire と Ui-Lillaigh の人々がパトリックに引き起こすトラブル
- (5) パトリックと4人の聖人, すなわち聖ブレンドン (St. Brendan), 聖マーティン (St. Martin), 聖デーヴィッド (St. David),

および聖フィアークル(St. Fiacre)

(6) パトリックとシャムロックに関するエピソード

コッパーはパトリックに関する以上のエピソードを解説し、『ウェイク』のテキストのうち3.6から478.21までを取り上げている。しかしながら、本稿で扱う第Ⅲ部第3章の冒頭(474.1-485.7)については“*Moy jay trouway la clee dang les champs*” (478.21)を論文の末尾で引用している以外には全く触れてはいない。このためこの章の冒頭部分におけるパトリックに関する言及を考察する価値は大いにあるのではないと思われる。

### 3. 第Ⅲ部第3章冒頭における聖パトリックのエピソード

それでは、『ウェイク』第Ⅲ部第3章の冒頭(474.1-485.7)で、聖パトリックはどのように取り上げられているのだろうか。この範囲におけるジョイスによる聖パトリックのエピソードの概略をテキストに沿って確認しておきたい。

この範囲の中心となるのは、“mamalujo” (476.32)という呼び名に一括されている四人の老歴史家、すなわちマット・グレゴリー(Matt Gregory), マーカス・ライオンズ(Marcus Lyons), ルカ・ターピー(Luke Tarpey), ジョニー・マクドゥーガルJohnny MacDougall(彼らには、それぞれMatthew, Mark, Luke, Johnという聖書中の人物名が重ねられている)によるヨーンに対する尋問、すなわち“starchamber quiry”(「星室庁尋問」, 475.18-19)である。

第Ⅲ部第3章における聖パトリックの名前は、横たわっているヨーンの描写の最初で“the odd trick of the pack, trump and no friend of carrots. And, what do you

think, who should be laying there above all other persons forenenst them only Yawn!” (476.17-19, 下線は筆者による)と現れるのが初出である。パトリックの名前が“trick”と“pack”に解体されて出されているのは、あたかも遺跡の発掘の際に過去の遺物が断片となって掘り出される状況を思い起こさせる。なお、ジョイスはパトリックが生きた時代、すなわち西ローマ帝国滅亡(476年)直前のローマ時代のブリタニアやアイルランドの時代背景にも留意しており、“Yawn in a semiswoon lay awaiting”(「ヨーンは半ば気を失って横たわって待ち嘆く横たわり」, 474.11)という描写では古代ローマの銅貨である“semis”(セーミス貨)が重ねられている。

横たわっていたヨーンは次のように目覚め、ここから四人の歴史家による尋問が始まる。

—Y?

—Before You! (477.31-32)

ここでのヨーンの第一声である“Y”について、ジョン・ゴードン(John Gordon)は、「Y-girlであるIssyを求める声である」(238)とした上で、さらに「パトリックの誘拐された女のきょうだいのルピタである」と述べている(239)。

ヨーンは、四人の尋問を上手にかわしていき、明確な答えを与えはしない。歴史家の一人マットによる“Friends! First if yu don’t mind. Name yur historical grouns.”(「歴史的な基盤=経歴を述べよ」, 477.35)という問いかけにも“This same prehistoric barrow ’tis, the orangery.”(「先史の古墳で、オレンジ栽培園だ」, 477.36)と答え、ちぐはぐなやり取りがなされている。ミカエル・ベグナル(Michael H. Begnal)が

*Dreamscheme*で述べているように、ここでの問答は、コミュニケーションのための共通の言語をふまえたものではなくなっているのである (91)。

ヨーンは、まもなくフランス語を話し始め (478.19-22を参照)、会話はますます混乱したものとなる。ヨーンがフランス語を話す理由として、ローランド・マッキューは *Annotations to Finnegans Wake* の中で、“St Patrick originally from France”との注をつけている (478)。パトリックの誕生の地には諸説があるが、ブリテン島北部という説が有力である。トマス・カヒル (Thomas Cahill) は『聖者と学僧の島』で、パトリックはアイルランドに布教に来る前に、現在はフランスであるガリア地方のカヌヌ沖の地中海にあるレラン (Lerina) 島の修道院で修行をし (421年-430年)、そこで司祭、ついで司教となったと解説している (150-151)。いっぽうエドマンド・エプスタイン (Edmund Epstein) は、ここではヨーンに重ねられたトリスタンがフランス語で話していると解釈している (191)。ヨーンのフランス語の台詞の中でも、“*mais Moy jay trouvoy la clee dang les champs. Hay sham nap poddy velour, come on!*” (478.21-22) は、ドイツ語の“klee”が英語の“clover”であることや、“sham nap”が“shamrock” (「シャムロック」) を連想させることから、聖パトリックと特に関連づけることができよう。

続いてマットとヨーンの間で、次のような問答が行われる。

Whur's that inclining and talkin  
about the messiah so clover? A  
true's to your trefling! Whure yu!

- Trinathan partnick dieudonnay.  
Have you seen her?

Typette, my tactile O!

- Are you in your fatherick,  
lonely one?

- The same. Three persons. Have  
you seen my darling only one?  
I am sohohold!

(478.24-30, 下線は筆者による)

ここで、“messiah so clover”は“clover”すなわち「shamrockの救世主」と読める。ヨーンは“Whure yu!”という問いに“Trinathan partnick”と答え、ここで“Tristan”, “Jonathan Swift”, “St. Patrick”というヨーンに重ねられた三つのアイデンティティが示されている。この時もヨーンは、“Y”の所在が気になっており、“Have you seen her?”, “Have you seen my darling only one?”と問いを重ねている。

マットによる尋問が続く中で、ヨーンは突然、“The woods of fogloot! O mis padredges!” (478.34) と叫ぶ。“The woods of fogloot”とは、アイルランド西北部のメイヨー州にあったとされる「フォックルートの森」のことである。(この森のスペリングには様々な異形がある。)『ウェイク』のこの部分は、パトリックが自ら記した『告白』の次に引用するエピソードに由来する。パトリックは、アイルランドでの奴隷生活のあと逃亡して、ブリタニアの両親のもとに戻る。そこである夜パトリックは、アイルランド西部の“Focluti”の森の近くにいる大勢のアイルランド人が自分と呼んでいる声を耳にするのである。

And there I saw, in the midst of the  
night, a man who appeared to come  
from Ireland, whose name was  
Victorious, and he had innumerable

letters with him, one of which he gave to me; and I read the commencement of the epistle containing “The Voice of the Irish”; and as I read aloud the beginning of the letter, I thought I heard in my mind the voice of those who were near the wood of Focluti, which is near the western sea; and they cried out: “We entreat thee, holy youth, to come and walk still amongst us.” And my heart was greatly touched, so that I could not read any more, and so I awoke. Thanks be to God that, after very many years, the Lord hath granted them their desire! (14-15)

その後『ウェイク』のテキスト歴史家の一人であるジョニーの台詞が次のように続く。

I used to be always overthere on the fourth day at my grand-mother’s place, Tear-nan-Ogre, my little grey home in the west, in or about Mayo when the long dog gave tongue and they coursing the marches and they straining at the leash. (479.1-4)

ここでジョニーは、「フォックルートの森」があったメイヨーにも言及している。このあとヨーンは，“Dood and I dood. The wolves of Fochlut! By Whydoyoucallme? Do not flingamejig to the twolves!” (479.13-14)と述べている。ヨーンの台詞は、アイルランド独立運動指導者のチャールズ・スチュワート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846年-1891年) が述べたとされる “Do not throw me to wolves.” をもとに

したものだと考えられている。

パーネルの「狼たちに自分を投げ込まないでもらいたい」という台詞についてジョイスは「パーネルの影」 (“The Shade of Parnell”) と題した評論の結末で次のように触れている。

In his final desperate appeal to his countrymen, he begged them not to throw him as a sop to the English wolves howling around them. It redounds to their honour that they did not fail this appeal. They did not throw him to the English wolves; they tore him to pieces themselves. (228)

グラシーンは、*Third Census of Finnegans Wake* で、“As Irish Moses (q.v.), Parnell is strongly linked to St Patrick (q.v.), who suffered at Irish hands and came again to Ireland.” (223) と指摘している。パーネルは オシー (O’Shea) 大尉夫人の キャサリン・オシー (Katherine O’Shea) と不倫の関係にあった。二人が連絡をとるために作ったパーネルのコードネームが “Mr. Fox” であり、オシー夫人のが “Kitty” であったことはよく知られている。

『ウェイク』では、このあとの480.19-33で、中世フランスの『狐物語』 (*Roman de Renart*) への言及が目立っており、キツネに騙された様々な動物が登場する。キツネとこれら動物たちとの関わりもパーネルとその周囲の人物との関係を暗示しているのかもしれない。例えば『狐物語』におけるキツネとオオカミとの対決はパーネルとイギリスとの対決そのものである。またマッキューは、*Annotations to Finnegans Wake* で、

“goupil”が古いフランス語で“fox”の意味であることから，“Scents and gouspils!”（480.33）が“saints and fox”と読めることを指摘している（480）。こう読むとこの部分は、ジョイスの『若い芸術家の肖像』（*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 以下『肖像』とする）の第1章で描かれているクリスマスディナーにおけるカトリックの神父とパーネルに関する議論につながるように思われる。特に、その時にケイシー氏（Mr Casey）が語るアークロウでのおばあさんが口にしたパーネルに対する野次の台詞を思い起こさせる。

*Priesthunter! The Paris Funds! Mr Fox! Kitty O'Shea!* (35)

“Do not throw me to wolves.”という台詞による聖パトリックとパーネルとの結びつきは、古代アイルランドをジョイスの少年期のアイルランドに結びつけ、さらに19世紀末から20世紀初頭に見られたカトリック信仰の形骸化を再認識させることにつながられていく。なお、後述するように『ウェイク』の第Ⅲ部第3章冒頭と『肖像』のテキストの相互関連は他にも見ることができる。

このあと『ウェイク』のテキストでは、パトリックが最初に囚われの身となって奴隷の生活をしていたアイルランドから脱出するときのエピソードに関する言及が二つ続く。一つ目は大型犬アイリッシュ・ウルフハウンド（Irish Wolfhound）についてのエピソードである。聖パトリックは、少年期の名前をパトリキウス（Patricius）と言い、ブリタニアからアイルランドに連れて来られ、奴隷として北東部のアントリムの丘で羊飼いをしていた。奴隷生活の6年目に逃亡し、ダブリンよりも南のウェックスフォード近くでアイリッ

シュ・ウルフハウンドを大陸に運ぶ船に乗り込んで、アイルランドを去ることに成功するのである（カヒル142-146）。このエピソードは、『ウェイク』のヨーンの台詞“Call Wolfhound! Wolf of the sea. Folchu! Folchu!”（480.4-5）に反映されている。この中の“Wolfhound”がアイリッシュ・ウルフハウンドで、この犬はオオカミより早く走り、また唯一オオカミを倒すことができたと言われている。そのため、家畜を守るために用いられ、ローマ帝国時代に珍重され貢物にもされていた。

二つ目は、この船の船乗りたちがパトリキウスとの信頼関係の証として裸の胸の乳首を彼に吸わせようとしたというエピソードである。これはアイルランドでは古くから行われていた風習である。このエピソードは、ヨーンの台詞の中の

— Magnus Spadebeard, korsets  
krosser, welsher perfyddye. A de-  
stroyer in our port. Signed to me  
with his baling scoop. Laid bare his  
breastpaps to give suck, to suckle  
me. Ecce Hagios Chrisman!

（480.12-15, 下線は筆者による）

に現れている。

パトリックのプライベートな心の叫びも二回現れている。一つは怒りの叫びである。フィリップ・フリーマン（Philip Freeman）は、*St. Patrick of Ireland: A Biography*で次のエピソードを紹介している。

About two hundred years after the death of Patrick, the seventh-century Irish biographer and churchman Muirchú records a phrase that may

go back to Patrick himself. The story goes that one Sunday when Patrick was trying to rest, he was disturbed by a group of noisy pagans. He ordered them to be quiet, but they just laughed. In his anger he blurted out *Mudebroth!* This word makes absolutely no sense in Latin or Irish, but as an old British phrase it would have meant something like “By God's judgment!” The surest way to discover anyone's native language is to listen to him when he's really angry. (10-11)

このようにパトリックは、騒々しい異教徒たちに休息を妨げられたときに、“*Mudebroth!*”と叫んで諫めたと言われているが、その時の叫び声が、『ウェイク』のテキストでは“White eyeluscious and muddyhorsebroth! Pig Pursyriley!” (482.5, 下線は筆者による)というおそらくはヨーンの台詞の中に現れている。もう一つは、パトリックが長く抱えている苦悩である。パトリックは、彼が書いた『告白』の中で、助祭の叙階を受けることになる前の晩に友人に過去に犯した罪について告白したという。それは彼が15歳のときに犯したもので、長く心の中にうずいていたものという。(カヒル150, 160, および *Confession* 27を参照)。マッキューの注釈は、このことと『ウェイク』のテキストの“my leperd brethern, the Puer, ens innocens of but fifteen primes.” (483.20-21) との関連を指摘している。

以上が、第Ⅲ部第3章冒頭で見られるパトリックに関する具体的な言及である。『ウェイク』の他の箇所におけるパトリックに関する言及と比べると、ここでは歴史年表に記載

されるようなアイルランド社会にパトリックが及ぼした影響よりもむしろパトリックの個人的な体験や内面に抱えた思いに終始しているのが特徴であろう。

このようなパトリックの個人的な体験の記述は、『肖像』に描かれているスティーヴンの体験の描写と共通することが多い。たとえば、パトリックは、ブリタニアに戻ったときに夢の中で「アイルランドに戻って来てもらいたい」との声を聞いて、南フランスの修道院での修行ののちに司教となってアイルランドで布教を行う。これは次に掲げるスティーヴンがダブリンのノース・ブルの浜辺で世界の彼方からの声を聞いて芸術家になる決意を固める場面を想起させる。

Disheartened, he raised his eyes towards the slowdrifting clouds, dappled and seaborne. They were voyaging across the deserts of the sky, a host of nomads on the march, voyaging high over Ireland, westward bound. The Europe they had come from lay out there beyond the Irish Sea, Europe of strange tongues and valleyed and woodbegirt and citadelled and of entrenched and marshalled races. He heard a confused music within him as of memories and names which he was almost conscious of but could not capture even for an instant; then the music seemed to recede, to recede, to recede: and from each receding trail of nebulous music there fell always one longdrawn calling note, piercing like a star the dusk of silence. Again! Again! Again! A voice

from beyond the world was calling.

—Hello, Stephanos!

—Here comes The Dedalus!

(181-82, 下線は筆者による)

その後スティーヴンは、芸術家の修業のためにパリに向かう。ただし出発前の4月3日に書いた日記に“the shortest way to Tara was *via* Holyhead” (273) と記していることは見逃せない。タラへ戻るといふ決意はパリでの修業のあと、アイルランドに戻るといふ決意であるが、あえてタラと述べているところにスティーヴンの聖パトリックに対する意識が読み取れるのである。

聖パトリックはタラでドルイド僧たちの対決を経たのち、アイルランドでのキリスト教の布教をはじめ、これによって「魔法の支配していたアイルランドから、大きな恐怖心をとりのぞいた」(カヒル 339) のであった。パトリックがキリスト教という文明の光をもたらしたのに対し、スティーヴンを通して描かれているジョイス自身は何を行ったのだろうか。それは、カトリックによる精神の空しい支配がはびこったアイルランドにモダニズムの光をもたらしたことではなかったのだろうか。

スティーヴンはさらに、4月14日付の日記に「アイルランド語を話す老人とぼくは格闘しなければならない」と下記のように記しているが、これはパトリックが対決したドルイド僧のことを想起させ、やはりスティーヴンとパトリックが重なるように思われる。

14 *April*: John Alphonsus Mulrennan has just returned from the west of Ireland. (European and Asiatic papers please copy.) He told us he met an old man there in a

mountain cabin. Old man had red eyes and short pipe. Old man spoke Irish. Mulrennan spoke Irish. Then old man and Mulrennan spoke English. Mulrennan spoke to him about universe and stars. Old man sat, listened, smoked, spat. Then said:

—Ah, there must be terrible queer creatures at the latter end of the world.

I fear him. I fear his redrimmed horny eyes. It is with him I must struggle all through this night till day come, till he or I lie dead, gripping him by the sinewy throat till... Till what? Till he yield to me? No. I mean him no harm. (274)

パトリックは、15歳のとき犯した罪の意識に苛まれ友人に告白をしたというが、これもスティーヴンが14歳のときの娼婦との交渉に苦しみ、告解によって救われたことを思い起こさせる。さらに、前述のようにヨーンは“Y?”と声を発し、イシー (Issy) を求めているが、Issyは、スティーヴンが熱を上げる相手の女性E-C-を暗示しているともできよう。

以上のことから、ヨーンに重ねられたパトリックの描写には、スティーヴン、あるいはジョイス自身の姿が投影されているともできよう。

#### 4. Mamalujoとヨーンの歴史をめぐる対決

『ウェイク』の第Ⅲ部第3章冒頭では、歴史をどう捉えるかということも問題になっている。このことを考えるにあたり、まず聖パトリックのアイルランドでの改宗に関するカ



ヒルの解説に注目したい。

パトリックは、これから改宗しようとする人たちに、現世の利益をわけあたえることはできなかつた。そのため彼は、自分の伝道を、彼らのもっとも切実な心配事へ結びつける方法を見つけださなくてはならなかつた。それは、キリスト教がまだ流入したばかりの頃、女や奴隷たちが、自分たちの地位の向上と人間としての威厳をもとめて、新しい宗教にむらがり寄つたその時代以来、だれひとりとしてまともにたち向かうことのなかつた挑戦だつた。パトリックは、聖書とアイルランド人の生活とのあいだの橋わたしをしたわけだが、このおどろくべき関連性を再発見するためには、アイルランド人の歴史のなかでも、唯一のかなめともいふべきこの時代に、アイルランド人がどんな意識をもって生きていたのか、われわれはそれを徹底的に調べてみる必要がある。(176-78)

カヒルは、さらに次のように続けている。

彼らの意識を知ること重要だが、おそらくさらに重要なのは、彼らの潜在意識だろう。というのも、人々が見る夢のなかには、もし、われわれがそれを正しく読みとることができるなら、彼らのもっとも深い部分でうごめいている恐怖や、もっとも高揚したかたちであられる憧れを見てとれるからである。われわれは、アイルランド人の夢のいくばくかをすでに知っている。『トイン』のような、前キリスト教時代の口承物語（これは、すぐあとで文字に写されるわけだが）や、考古学者によって発掘された工芸品など

から、彼らの神話をつなぎ合わせてまとめあげることができるからだ。

神話こそ蓄積された夢の物語である。  
(178)

第Ⅲ部第3章冒頭でヨーンは“the mountainy molehill” (474.22) として登場する。これは“knoll Asnoch” (476.6) と示されているパトリックが訪れたとされる丘である“Hill of Uisneach”に重ねられる。さらにヨーンは、自分のことを「先史時代の古墳」を意味する“prehistoric barrow” (477.36) と述べている。“mamalujo”の四人が歴史家としてヨーンへの尋問を通して何を知ろうとしたのかということは、本稿で取り上げる範囲では明確ではない。ただし、古墳からの出土品を通して、我々が一般に知りたいことは、カヒルのことばを用いると、古代のアイルランド人の抱いていた意識であり、さらには神話にまとめ上げられた彼らの潜在意識なのではないだろうか。

すでに述べたように四人の歴史家たちは、“starchamber quiry” (475.18-19) によってヨーンを徹底的に調べようとし、また“the boguaqueesthers”（「沼地の検察官」, 476.36）として、あるいは“*And a crack quatyouare of stenoggers they made of themselves*” (476.13-14) の中にある「一流速記タイプライター」となって記録をしようとするのである。

*Annals of the Four Masters* という年代記作者である四人の歴史家はヨーンから記録に値する歴史上の知識を得ようとする。彼らは尋問を行う前に漁師となって、「知識の鮭」を得るための漁を行うための網をヨーンの上にどのように張るかを考える。

And as they were spreading abroad

on their octopuds their drifter nets,  
the chromous gleamy seiners' nets  
and, no lie, there was word of asso-  
nance being softspoken among those  
quartermasters. (477.11-13)

歴史家たちは「知識の鮭」をこの“net”を用いて獲得することに失敗する。『肖像』でステューヴン・ディーダラスは、

When the soul of a man is born in  
this country there are nets flung at  
it to hold it back from flight. You  
talk to me of nationality, language,  
religion. I shall try to fly by those  
nets. (220)

と述べて、国家、言語、宗教という“net”を抜けて飛翔すると宣言したが、歴史家たちがヨーンから何とか獲得したいと考えたものも“net”をすり抜けてしまうことになる。

歴史の時間を把握するための“net”となっているものが国家や宗教と結びついて制定された紀年法である。具体的には君主の即位と結びついた元号やイエス・キリストの誕生と結びついた西暦（キリスト紀元）などが挙げられよう。キリストの誕生年を元年として年を数える（佐藤37）西暦は、ローマで550年ごろに亡くなった神学者・年代学者ディオニシウス・エクシグウス（Dionysius Exiguus）が考案したものであるが、なかなか広まらず、ヨーロッパの一部の国で用いられるのは10世紀になってからであり（『世界大百科事典』「紀年法」）、当然、聖パトリックの時代にはまったく用いられてはいなかった。にもかかわらず、『ウェイク』の第Ⅲ部第3章のこの冒頭部分では西暦に関するこだわりを読み取ることができる。あとの引用で

“mamalujo”の四人のそばにある“his cubical crib”は、「立方体の飼葉桶」の意味であり、これによって四人の歴史家がヨーンに会う場面は、“magi”である東方の三博士がイエス・キリストの降誕を訪問する場面に喩えられている。

a mamalujo by his cubical crib, as  
question time drew nighing and the  
map of the souls' groupography rose  
in relief within their quarterings....  
(476.32-34)

紀年法に関わるものについての言及は、他の箇所にも見つけることができる。テキストのあとのほうで、パトリックの名前は、“Lowman Catlick's patrician”（485.1）のように変形されて出されているが、パトリックが生きた時代にかろうじてまだ勢力を保っていたローマ帝国や彼が関わったローマカトリック教会に関する言及もテキスト中に散見される。そして、パトリックのほぼ同時代を生きた西方キリスト教会の教父アウグスティヌス（Aurelius Augustinus, 354年—430年）が著した『神の国』（*De civitate Dei*）を思わせる“Chivitats Ei”が次のヨーンの台詞に現れている。

—Ouer Tad, Hellig Babbau, whom  
certayn orbits assertant re humeplace  
of Chivitats Ei, Smithwick, Rhonnda,  
Kaledon, Salem (Mass), Childers,  
Argos and Duthless.  
(481.20-22, 下線は筆者による)

『神の国』は、宇宙の誕生、人類の創造と墮落、人類の歴史、最後の審判と神の国の実現を論じたもので、のちのキリスト教的歴史観

の形成に大きな影響を与えたものである(『世界大百科事典』「神の国」)。そして、世界共通の紀年法の制定のもとになる普遍史の形成のさきがけとなったものである(岡崎42)。これと関連して、終末論(eschatology)も次のマットの台詞の中に現れている。

That's the point of eschatology our book of kills reaches for now in soandso many counterpoint words.

(482.33-34, 下線は筆者による)

年代記作者の“mamalujo”とヨーンの対立は、次の引用に明らかであろう。ここでマットは、直線的なキリスト教的歴史観に基づいた最後の審判日や紀元後、紀元前と読める語をちりばめて、ヨーンに尋問を行っている。これに対してヨーンは、夢と循環的時間である曜日(部12-14)を用いて応酬している。

— A cataleptic mithyphallic! Was this *Totem Fulcrum Est* Ancestor yu hald in *Dies Eirae* where no spider webbeth or *Anno Mundi* ere bawds plied in Skiffstrait? Be fair, Chris!

— Dream. Ona nonday I sleep. I dreamt of a somday. Of a wonday I shall wake.

(481.4-8, 下線は筆者による)

この箇所の“*Dies Eirae*”には、最後の審判日を表す“*Dies Irae*”とアイルランドを示す“*Eire*”が重ねられており、“*Anno Mundi*”からは“*anno Domini*”(「西暦紀元」)、“*Be fair, Chris!*”からは“*before Christ*”(「紀元前」)をそれぞれ読み取ることができる。重要な箇所なので、以下に宮田恭子氏による邦訳を引用しておく。

— 常同症の神話的男根崇拜！ 君のこの寝台柱的な美の先祖は巣を張る蜘蛛もいない**最後の審判日**に生きていたのか、それとも娼婦がスキッフ・ストリート客待ちする前の**世界紀元**に生きていたのか？  
紀元前だ！

— 夢なのです。月無曜日にはぼくは眠ります。いつかの土曜日、夢を見ました。水驚日には目覚めるでしょう。(521)

## 5. 結論

『ウェイク』第Ⅲ部第3章において、ヨーンに対する尋問はマットによる“*Friends! First if yu don't mind. Name yur historical grounds.*”(「歴史的な基盤=経歴を述べよ」, 477.35)という問いかけにはじまり、ヨーンはこれに対して、“*This same prehistoric barrow 'tis, the orangery.*”(「先史の古墳で、オレンジ栽培園だ」, 477.36)と答えていた。狭い意味での歴史学が文字として書き残された記録をという意味の歴史を取り扱うのに対し、先史学(prehistory)が文字の出現以前の時代を取り扱っているため、お互いのやりとりがかみ合わないまま続くのも当然と言えば当然なのかもしれない。では、本稿で検討してきた彼らの頓珍漢な問答にどのような意義があるのだろうか。

エプスタインは、『ウェイク』の第Ⅲ巻第3章について、“*In this chapter, we the readers are given a tour through the whole of history, from the Creation of the universe to the creation of the city.*”(190)と述べ、この章が宇宙の創造から近代都市の建設に至る長い歴史を取り上げていると説明している。我々はこの章の冒頭部における歴史に関わる二つの問題、すなわち聖パトリックの描写と紀年法を考えてきたが、これらの二つはアイルランド人の心に世界観と

歴史観に関する大いなる革新をもたらしたものである。

まず、パトリックはキリスト教の伝道により、ドルイド僧が支配していたアイルランド人の不安と恐怖に満ちた世界観を安心に満ちたものに変えていった。これについてカヒルは次のように説明している。

パトリックの魔法とドルイド僧の魔法のちがいは、パトリックの世界では、生きものや出来事が、すべて、よき神の御手から生じていることだ。神は人間を愛し、人間がなしとげることがいつも願っている。この成功は最終的なものなのだが、だからといって、苦しみはとりのぞかれない。しかし、自然のすべてが、すなわち、神が創造した宇宙の全体が、人間に教えをたれ、援助し、救いながら、人間の善に協力してくれる。(185)

カヒルは、「パトリックは、聖書とアイルランド人の生活とのあいだの橋渡しをしたわけだ」(178)と述べていた。その結果、人々の心を恐怖と魔法で支配していたドルイド時代

のケルト的アイルランドはキリスト教と結びつけられ、多種多様な渦巻き文様や組紐模様、奇怪な姿の動物たちに飾られた『ケルズの書』(*The Book of Kells*)が生まれた(図版1)。*『ケルズの書』*は、彼らが抱いていた世界の基本的なイメージを表すものであろう。

その後、早くても10世紀以降に、アイルランドにも西暦が導入され、普遍的な目盛りに基いて歴史記録がなされていく。同時に西暦とキリスト教的歴史観との重なりが人々の心を支配するようになる。*『ユリシーズ』*第2挿話におけるスティーヴンの“History... is a nightmare from which I am trying to awake.”(2.377)<sup>3)</sup>という台詞は、直線的・目的論的なキリスト教的歴史観に対する問題提起であり、西暦という紀年法とキリスト教に支配された歴史観が「現実」をつくりあげてきたことを前景化する。

聖パトリックの名前が、*『ウェイク』*全体の中で最初の登場するのは、第I巻第1章の冒頭の“thuartpeatrick”(1.10)という造語の中である。ここでジョイスは、「マタイ伝」の中の“thou art Peter”という部分と“Patrick”を重ね合わせている。「マタイ伝」では、イエス・キリストが最初の弟子である聖ペテロ(St. Peter)に“And I say also unto thee, That thou art Peter, and upon this rock I will build my church; and the gates of hell shall not prevail against it.”(Matthew 16:18)と述べ、教会が不動であることを説いたことはよく知られている。*『ユリシーズ』*第9挿話でスティーヴンは「マタイ伝」のこの箇所を次のようにもじって、教会が巖の上ではなく空無の上に築かれたものであると述べていた。



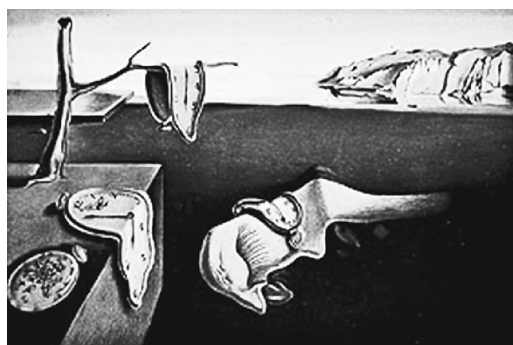
図版1 *The Book of Kells*, Folio 124r. part of St. Matthew's gospel, with roaring profile lions. Trinity College Dublin.

the church is founded and founded irremovably because founded, like

the world, macro and microcosm,  
upon the void. Upon incertitude,  
upon unlikelihood. (9.840-42)

聖パトリックは、ドルイド時代の古代アイルランドをキリスト教の光で照らすことで民衆に大いなる安心をもたらした。しかしそれからおよそ1500年後、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アイルランドではカトリシズムの形骸化が進んでいく。こうした中で、ジョイスはモダニズムという新しい文化の動きをアイルランドにもたらすのである。6月16日は、ジョイスの『ユリシーズ』の舞台となった日で、主人公の名前に因んで「ブルームズデイ」として、3月17日の「セントパトリックスデイ（聖パトリックの日）」と同様に毎年ダブリンで盛大に祝われている。

ジョイスは、アイルランド人が抱いてきた世界観や歴史観が夢と現実が表裏一体となっている中で形成されていたことを四人の年代記作者のヨーンに対する尋問の場面を通して明らかにする。歴史や時間を夢の中で捉えるという『ウェイク』の我々が読んできた部分のイメージは、奇しくも1931年にサルバドール・ダリ (Salvador Dali) がパリのピエール・コル画廊ではじめて展示した『記憶の持続性』(The Persistence of Memory, 図版2) と一致しているように思われる。



図版2 Salvador Dali, *The Persistence of Memory* (1931). Museum of Modern Art, New York City

\* 本稿は、2013年6月15日に京都大学文学部で開催された日本ジェイムズ・ジョイス協会第25回大会「ワークショップ *Finnegans Wake*, III.3 (474.1-485.7)」の講師の一人として発表を行った原稿に、大幅な加筆と修正を施したものである。

#### 注

- 1) 『フィネガンズ・ウェイク』のテキストには、James Joyce, *Finnegans Wake*. (London: Faber, 1975) を用い、引用のあとの括弧内にこのテキストからの引用の頁番号と行番号とを示した。
- 2) この対決についての原聖氏による解説を引用しておく。

異教の聖地タラでは、すでに述べたウイ・ネール家のリーレ王、さらには「智者で魔術に長けたドルイドたち」と対決する。パトリックがドルイドを打ち負かし、異教に対するキリスト教の勝利が宣言される。こうしてリーレ王はパトリックの布教を認めるのである。(206)

- 3) 『ユリシーズ』のテキストには、James Joyce, *Ulysses*. (New York: Random House, 1986) を用い、引用のあとの括弧内にこのテキストからの引用の挿話番号と行番号とを示した。

#### 引用・参考文献

- Atherton, James S. *The Books at the Wake: A Study of Literary Allusions in James Joyce's Finnegans Wake*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1959. Print.
- Begnal, Michael H. *Dreamscheme: Narrative and Voice in Finnegans Wake*. New York: Syracuse UP, 1988. Print.
- Bury, John B. *Life of St. Patrick and His Place in History*. New York: Cosimo, 2008. Print.
- Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skelton Key to Finnegans Wake*. New York: The Viking Press, 1944. Print.

- Epstein, Edmund Lloyd. *A Guide through Finnegans Wake*. Gainesville: UP of Florida, 2009. Print.
- Freeman, Philip. *St. Patrick of Ireland: A Biography*. New York: Simon&Schuster, 2004. Print.
- Glasheen, Adaline. *Third Census of Finnegans Wake: An Index of the Characters and Their Roles*. Berkeley: U of California P, 1977. Print.
- Gordon, John. *Finnegans Wake: A Plot Summary*. Dublin: Gill and Macmillan, 1986. Print.
- Hofheinz, Thomas C. *Joyce and the Invention of Irish History: Finnegans Wake in Context*. New York: Cambridge UP, 1995. Print.
- Joyce, James. *Finnegans Wake*. London: Faber, 1975. Print.
- . *Portrait of the Artist as a Young Man*. Harmondsworth: Penguin, 1992. Print.
- . “The Shade of Parnell.” *The Critical Writings*. Ed. Ellsworth Mason and Richard Ellmann. Ithaca: Cornell UP, 1989. Print.
- . *Ulysses*. New York: Random, 1986. Print.
- Kopper, Edward A. Jr. “Saint Patrick in Finnegans Wake.” *A Wake Newslitter*. Vol. IV, No. 5 (Oct. 1967): 85-94. Print.
- McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. 3rd ed. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2006. Print.
- Patrick, Saint. *The Confession of Saint Patrick: With the Tripartite Life, and Epistle to the Soldiers of Coroticus*. London: Aziloth Books, 2012. Print.
- Rose, Denis, and John O’Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce’s Masterpiece*. New York: Garland, 1982. Print.
- 岡崎勝世『聖書vs.世界史：キリスト教的歴史観とは何か』講談社現代新書, 1996.
- 佐藤正幸『歴史認識の時空』東京：知泉書館, 2004.
- . 『世界史における時間』東京：山川出版社, 2009.
- ジェイムズ・ジョイス (宮田恭子訳) 『フィネガンズ・ウェイク』東京：集英社, 2004.
- 薮勇三『歴史意識の芽生えと歴史記述の始まり』東京：山川出版社, 2004.
- トマス・カヒル (森夏樹訳) 『聖者と学僧の島：文明の灯を守ったアイルランド』東京：青土社, 1997. (原著は, Cahill, Thomas. *How the Irish Saved the Civilization*. New York: Bantam Doubleday Dell, 1995.)
- 原聖『ケルトの水脈』(興亡の世界史 第7巻) 東京：講談社, 2007.
- 電子辞書版『改訂新版 世界大百科事典』千葉：セイコーインスツル株式会社, 2013.